

# モダニズム転換期の『新青年』と長谷川海太郎

——「一人三人」を可能にするもの

古矢 篤 史

## はじめに

一九三五年の六月二十九日、昭和モダニズムを牽引した三人の作家がその死によって一斉に姿を消した。谷譲次、林不忘、牧逸馬——この三者をそれぞれ「作家」と呼んでよいものか、あるいは長谷川海太郎という一人の実存に収斂させてよいものか、近代日本のモダニズム文学史のなかでどのように記憶されてしかるべきかという点においてこれほど困惑させる作家も珍しい。実際それぞれの名は、もはや「映画「丹下左膳」の原作者とでもいえば、なんとか思い出してもらえようか<sup>①</sup>」という時代ですらなくなったかもしれないし、岩波文庫版『踊る地平線』の刊行を契機にして思い出されたように再評価の機運を与えられる場合もある。文学事典類にいたっては、「林不忘」の項で記載するものと「牧逸馬」の項で記載するものとに分かれており、それぞれが「独立した評価をうけている<sup>④</sup>」と評さ

れても確かに納得できるような状況である。長谷川海太郎はこのように、文学の記憶という問いの射程のなかで多大な示唆に富む対象となっている。

海太郎自身の内的な目的意識というところにも求められてよいだろうが、こうした「一人三人」という文物生産の方法を可能としたものは、むしろ外的な要因——すなわち震災後の出版ジャーナリズムを代表とするメディア空間である。近代日本のモダニズム表象の根底にはこの再編されたメディア空間がその母胎として拡がっており、「文壇」と呼ばれるものから遠い位置にいた海太郎にしてもその例外ではなかった。海太郎に「一人三人」の再生産を要請したジャーナリズムに内在する歴史的コンテクストを洗い出し、ペンネームによって分類された作品一つ一つを個別に論評するのではなく、その作品群がどのような関係性のなかで当時の文学場において機能しえたのかを考察する必要がある。

この調査研究の一部として、本稿では主に海太郎の出発点となっ

た雑誌『新青年』を対象とし、「一人三人」の誕生する一九二五年前後の『新青年』において震災後のメディア空間がどのように展開したかを論究することにした。

## 1、交錯する「探偵小説」と「移民文学」

一九三五年の海太郎の心臓麻痺による急死は、一人の流行作家の死以上の大きな意義をもっていた。その死へと至る過程はメディアによって用意され演出されたものであったといっても、何ら比喩でも誇張でもない事実として周囲には認識されていたようである。たとえば菊池寛の「話の屑籠」(『文芸春秋』、一九三五年六月)での追悼文にみられる以下のような思案は、この時期におけるメディアと作家の関係性を示すものとして注目される。

牧逸馬君の死は、我々にとつて、やはり一つのシヨックであった。同君とは、公会の席で一度挨拶した丈で、何の交際もなかったが、同業の情その急逝を惜しむものである。同君のやうな生活態度を取つた人は、もつと長生して、所謂鎌倉文士などが老後窮迫してウロウロする所を超然として見下して居るやうにならなければ面白くない。今死んだのでは、何と云つても、同君の敗である。しかし、同君の死んだので、ジャアナリズムが、作家に無理な仕事をさせなくなるとすれば、我々に取つて

は、一つの救ひである。

この後に「佐々木、直木、牧の死に依つて、大衆文学の分野には、新人の進出すべき大きな間隙が出来たわけであるが、しかしあまり目ぼしい人もあないのは、寂しいことである」と続けているのを見ると、菊池の脳裡には直木三十五に代表されるような過剰な量産の犠牲となつた大衆文学作家のことが浮かんできていたのであろう。平浩一が指摘しているように、直木や海太郎に典型的な「量産」というシステムは、「大衆文学」「純文学」の垣根を越えて多くの作家が捕えられていた問題であり、円本ブーム終息後の作家とメディアをめぐる現象の一つであつた。<sup>(5)</sup>「多忙でない流行の大衆作家といふことは、およそ言葉それ自身が意味をなさない」<sup>(6)</sup>とまで言われる制度、あるいは「生き急ぎ、大量に書き急がせた力」<sup>(7)</sup>が海太郎を常に駆り立てていたのである。

しかしながら、海太郎の場合は大正末期に作家として登場した時点からすでに「一人三人」の方法を確立させており、「大量生産の第一人者」<sup>(8)</sup>として強いられた「量産」の過程へと到達する以前に、三つのペンネームという形式で海太郎を引き裂いた別の要因が想定されなければなるまい。「一人三人」のスタイルは震災後の一九二四年にはすでに準備されていたのであり、翌年の『新青年』新年号を舞台とした海太郎の登場前後まで遡行した検証作業が不可欠なのである。冒頭で述べたように本稿は、雑誌『新青年』を中心とした

考察により、文壇に「モンスター」を生み出したこの母胎Ⅱメディアの実態を明らかにする試みである。

さて、海太郎が四年にわたるアメリカでの生活を一時的に切り上げ、水夫として乗り継いだ舟から抜け出して日本への帰国を果たしたのは、震災の翌年にあたる一九二四年のことだった。川崎賢子の調査で明らかにされているように、海太郎はこの年にはすでに阿多羅緒児などというペンネームを複数使い分けて「一人三人」の原型を演じていたが、ここでの表現は後の「めりけんじゃつぶ」<sup>⑩</sup>ものの萌芽が看取されうるとはいえ、やはり『函館新聞』という地方メディアにおける限られた現象にすぎなかった。「大量生産、大量消費、大量虐殺の恐怖に圍繞されつつ、言葉の発生、言葉の獲得の機構を身をもって反芻する、きわめて二十世紀的な作家の誕生」<sup>⑪</sup>と呼びうるような表象は、少なくともまだ充分には顕在化していない段階にある。その言語表現をモダニズムのメディア空間へと誘引し、機能させたのが森下雨村（岩五郎）を編集長とする『新青年』という装置であった。

友人の水谷準や雑誌『探偵文芸』を主催していた松本泰の繋がりから、当時の『新青年』の編集長であった雨村との交流がはじまり、海太郎は一九二五年の『新青年』新年号に谷譲次と牧逸馬という二つの名前を使い分けて登場する。その出発からしてすでに「量産」と呼んでよいほどの原稿量をこなしており、谷譲次名による「ヤング東郷」「ダンナと皿」「ジョウヂ・ワシントン」および「海外印象

詩」、牧逸馬名による翻訳「謎の貴族」「白妖姫」およびコラム「海外探偵界片聞」を載せ、加えて同じ一月発行の新春増刊号にも翻訳「意外」とコラム「『影の人』」を寄せている。二月以降も勢いは衰えずに譲次・逸馬の名前が同じ号に何度も現れ、五月にはその疲労のためか病氣となってランドン「灰色の幻」の翻訳を妹尾韶夫に交替してもらったり、七月からは二ヶ月にわたって七沢温泉に籠ったりするなど若干の停滞もみせたものの、八月号からはまた毎号欠かさず創作・随筆・翻訳・コラムなどジャンルを問わず執筆し、その掲載は『中央公論』による新世界巡礼の特派まで続いたのだった。翻訳と創作を軸とする牧逸馬としての仕事の蓄積、そして後に『テキサス無宿』『めりけんじゃつぶ商売往来』にまとめられる谷譲次名の随筆群は、このわずか二年弱という短期間での量産によって生み出されたものである。帰国後も「ヤトラカン・サミ博士の椅子」（牧逸馬、一九二九年一〇月）や「黄色い猶太人」の連載（谷譲次、一九三〇年一―三月）を寄稿してはいるが、海太郎の『新青年』を舞台とした活躍はすでに『中央公論』など他の雑誌へと移っていた。それでは、海太郎の初期における量産の舞台となった昭和改元前後の『新青年』は、どのようなメディアとして生成しつつ牧逸馬・谷譲次という二重性を可能にしたのだろうか。江口雄輔は『新青年』の歴史を大きく五期に区分しており、創刊から震災までの「創刊期」（一九二〇―一九二三年）、江戸川乱歩の登場から雨村が編集長を退任するまでの「探偵小説黄金期」（一九二三―一九二七年）、

横溝正史へと編集長が交替してから日中戦争勃発までの「モダンズム期」（一九二七年～一九三七年）、以降「戦時体制期」「戦後期」というふうに移ると概括している。<sup>(12)</sup>この区分の観点を借りながら改めてここでの論考に即した定義するならば、海太郎は「創刊期」から「探偵小説黄金期」への過渡期にあった『新青年』に呼び出され、「モダンズム期」へと転身する経路のなかでその分裂を加速させていくこととなる。すなわち、震災後に大衆化されていくメディア状況のなかで、三つの時期におけるそれぞれの特徴が混在する文学場に誘致された海太郎は、その幾重もの需要のもとに引き裂かれた作家として登場するのである。

まず、帰国した一九二四年にはすでに海外探偵小説の翻訳を開始しており、毎年恒例となる海外作品特集の増刊号も好評となっていた。前年には「二銭銅貨」（『新青年』、一九二三年四月）を皮切りに探偵小説の時代をリードすることになる乱歩の登場もあり、探偵小説雑誌としての『新青年』という方向性は雨村のなかで固まっていた。一方で、その前身である『冒険世界』の性格も引きずっていた「創刊期」の特色は多分に残っており、農村青年や若年労働者を対象とした読者層や、移民奨励・世界一周の記事にみられる海外雄飛のイデオロギーは健在であった。しかし、こうした「創刊期」的な言説群は一九二四年前後のある歴史的事象によって別種の言語秩序へと組み替えられていく。すなわち、一九二四年七月一日にアメリカで施行される通称「排日移民法」を核とした日本人の移民問題

が顕在化した時期であり、新聞のようなマス・メディアはもちろん『新青年』もこれと無関係ではなかった。こうした『新青年』におけるメディア空間の変動のなかで要請されたのが、一方で海外探偵小説の翻訳を中心とした作家牧逸馬であり、もう一方では排日が問題化した日米関係の危機の時代に「めりけん・じゃっぶ」ものを書いた「移民文学」の旗手谷譲次であった。

注意したいのは、一九二三年の「二銭銅貨」の発表が必ずしも「探偵小説黄金期」へと直結してはいないことである。乱歩は一九二五年になってもまだ「本邦に於ける唯一の探偵作家」という例外的な位置にあり、主要な執筆陣はというと依然として「創刊期」からの軍人・学者・ジャーナリストなどが多く見られ、国内作家による創作も充実しないために探偵小説枠は翻訳で占められていた。このように過渡期であったところにこそ、むしろ、海太郎登場の素地が見出されるのではないだろうか。同じ号に掲載される世界一周のフォトグラフや紀行文、永田稠を会長とする日本力行会の移民奨励に関する記事などとの関係性のなかで、海外探偵小説の翻訳もまた海外雄飛のイデオロギーの実践として布置されていたのである。加えて、前述のようにこの一九二四年前後が「排日移民法」の成立した「近代日本の移民史における大きな転換期にあった」<sup>(14)</sup>ことから、『冒険世界』からの移民奨励・海外雄飛のイデオロギーが危機を迎えるにあたって、それを語ることができ表象しうるテキストが要求されることになる。ここにおいて、牧逸馬が翻訳者として誕生する

素地と谷譲次が移民文学の旗手として誕生する素地とが交錯しあうメディアの構造が露呈するのであり、その文学場は江口雄輔のように乱歩の登場をもって探偵小説ブームの起点とする区分によっては見えなくなってしまうのではないだろうか。山下武は、この時期の雨村が「号を重ねる毎に徐々に翻訳探偵小説の量を増やしていき、（中略）雑誌の性格を次第に探偵読物中心の都市型青年雑誌へと変えていく」とする一方で、「但し、その後も職業軍人が論陣を張ったり、南洋生活のルポを掲載するなど、硬軟両様の構えをくずさなかった<sup>(15)</sup>」と述べているが、むしろそのような新旧の要素を併存させるような雨村の編集方針に海太郎の母胎があったのである。

海外探偵小説の翻訳に重点を置く雨村にとって、アメリカでの長期滞在にもとづく海太郎の知識や英語力は頼もしかったにちがいない。ランドン「灰色の幻」の連載開始にあたって「訳者牧君は長く米国にあつて、ランドンの描ける舞台上に最も通曉する人、加ふるに稀に見る才筆縦横の士、恐らく号を逐うて諸君を熱狂せしむるものがあるであらう<sup>(16)</sup>」と述べたり、乱歩の「心理試験」（『新青年』、一九二五年二月）の英訳を依頼したりする<sup>(17)</sup>ところからもその期待のほどが窺えるだろう。それと同時に、海外移住の実践者すなわち「移民」としての海太郎にも惹かれていたはずである。

雨村のなかでこのような編集の二重性が可能になったのはなぜだろうか。それを考察するためには、海外雄飛や移民規制の転換期となった一九二四年前後をもうすこし整理する必要がある。

## 2、国家と世界像の転換

海太郎に関する丸木砂土の同時代評「谷譲次論」（『中央公論』、一九二九年八月）は、『テキサス無宿』にまとめられた『新青年』での作品群を「移民文学」の嚆矢として評価し、「将来日本移民問題を論ぜられる時には、必ず谷譲次著『テキサス無宿』が引用される時機がくるに相違ない」とまで述べている。

「テキサス無宿」一卷は、日本で初めて現れた移民文学である。しかもそれは国際的に世界独自の移民であるメリケン・ジャップの文学である。メリケン・ジャップの生活は、波蘭における猶太人、満州における苦力、ミシガン湖畔の独逸人と共に、奇怪な民族的存在である。（中略）谷君はこの一冊を以て、日本文学史の上に新たな民族文学を、新しい混血文学を生み出した人であると言つて好い。

このように谷譲次としての諸作が「移民文学」として位置づけられるのは、単に「めりけん・じやつぶ」という移民の様相を描出しているからだけではなく、一九二四年の「排日移民法」下の移民問題をフォーカスするメディア空間のなかで生成しているからである。一九二四年は、移民保護奨励主義を時代背景としてイタリア提唱



によりローマで第一回国際移民会議が開催される一方で、アメリカの一九二四年移民法（排日移民法）のように帰化不能外国人の入国を禁止するなど、移民の奨励と制限に関する議論が国際的な関心事となっていた。とりわけ日本においては、狭い国土のなかで過剰に増加していく人口を調節するための政策として、また前年の震災による被災者の臨時的な救済措置として、加えて海外雄飛や共存共栄といったイデオロギーを大義としたコリアリズムの実践として、海外への移民送出は国家規模での課題となっていた。

アメリカではすでにカリフォルニア州での排日運動（サンフランシスコ学童隔離事件、排日土地法案など）が顕在化していたが、とりわけ一九二四年五月にクーリッジ大統領が新移民法案に署名、そして七月一日に「排日移民法」が施行されたのに及んで、日本のマスメディアは一斉に「反省」を促す批判的な記事を載せ、「屈辱の日」というふうな感情的な見出しが踊っていた。<sup>(18)</sup> 日米間の陰悪化とともに人種・民族の対立を意識した国民感情がメディアのなかで形成されていき、『日米若し戦はば』流の未来戦を扱った軍事表象が多数出版されるようになる。一九二四年前後は国民意識・ナショナリズムが「排日移民法」をめぐるメディアのなかで大きく転換した時期であり、これが海太郎ら『新青年』の新進作家ばかりでなく新感覚派と呼ばれた『文芸時代』同人たちなど、近代日本のモダニストたちが登場するのと重なっていることが注目されるのである。移民に関するもうひとつの動向も確認しておこう。上述のような

アメリカにおける「排日」の風潮に直面しながらも、一九二一年に社会局を設置して以降移民奨励に従事してきた内務省にとっては送出を頓挫させるわけにはいかなかった。一九二四年の帝国経済会議をその起点として渡航費を国庫負担する移民奨励策がまとめられ、アメリカに代わる移住地として南米（とくにブラジル）や満州などへの移民が飛躍的に拡大することになる。<sup>(19)</sup>

その目次を一瞥するだけでも『新青年』がこのような移民奨励のイデオロギー装置として機能していることがわかるだろう。たとえば林今吉「南洋へ雄飛せんとする人々に」（『新青年』、一九二四年五月）には、「内地」における人口問題や震災後の貧困に対する解決策としての移民奨励が端的に顕われている。

然も内地住民の、増殖力と、果しなき、物価の騰貴は生活難となり就職難となつて徒に遊民を作り生活苦を叫ばしむる。加ふるに東都震災は更に国民一部の衣食住をまで脅威して、思想の悪化を助長せしめて、我国特有の精神たる忠君愛国の神髄にまで汚点をつけんとするものさへ現はれるに至つた。（中略）この大問題を解決する為に、我々は海外移住を奨励したい。

とりわけ日本力行会の会長永田稠による一連の海外雄飛を扱った諸作や、同会による移住希望者との一問一答「海外発展問答」などは、一九二四年における移民奨励策の実践として注目されてよい。

ここでは、渡航の手段や費用、移住先での賃金や地価、就業の斡旋、参考図書などが具体的・実用的に紹介されている。永田の「南米の新移住地建設」(『新青年』、一九二五年七月)の記事などは一九二四年以降の南米移民奨励の典型であろうし、田口馳山(ブラジル通信)・林今吉(南洋通信)・清水国治(蒙古通信)などの各種海外通信の寄稿も、そのイデオロギーを補うものとして要請されたと考えられる。いずれも、民族ひいては国家をめぐる歴史的転換の刻印されたテキストとしてメディアに立ち現れているのである。

このような国家と世界像の転換期に登場した海太郎が、同時代に生長しつつあったナショナリズムに無関心であるはずがなかった。そして彼の周辺も、海太郎に一種の愛国者ないしは国家主義者というレッテルを貼ることがあった。丸木砂土は前掲「谷譲次論」のなかで谷譲次を「熱烈なる愛国者である。日本男児である」と看做しつつ、その作品群に「少年らしい愛国意識」が潜んでいることを批判的に論じている。

残念ながら、わが愛すべき「テキサス無宿」の著者も、嘗てはこの愛国者の一人であり、日本主義者の一人であつたらしい。軍備制限提唱国にあただけに、さすがに軍備拡張論はしてゐないが、排日国にゐて、その仇敵に等しい米国人をやつつけるメリケン・ジャップは、「テキサス無宿」の中では至る処に活躍してゐる。谷君がこの孤独なメリケン・ジャップの果敢ない勝

利に寄せた心は、排日国に生活する者の一応は誰しも持つべき感情に違ひない。排日されなくても、多くの人は海外愛国者になる位である。

千葉亀雄も牧逸馬について「彼は存外に強烈な国家主義者であつた」と述べている。丸木の文章からもわかるように、谷譲次のテキストは明らかに一九二四年前後の排日問題と結びつけられており、そのなかで国家や国民について語りえたことによつて愛国者というような規定がなされていると考えられるのである。メディアのなかで生誕し、メディアのなかで見出されることによって、谷譲次・牧逸馬は国家主義者という位置づけと記述に晒されてきたのであつた。この恣意性がメディアを規範として歴史的に形成されたものであることをこれまでに確認してきたわけであるが、ここでようやく海太郎の表現や国家論を改めて読みなおす準備を整えることができた。『テキサス無宿』および『めりけんじゃつぷ商売往来』の諸テキストと一九二四年前後の国民国家形成との間に、どのような関係性と抗争の痕跡が読みとられうるのであろうか。

### 3、「めりけん・じゃつぷ」というメディア

『新青年』でのデビュー作となつた「ヤング東郷」からすでに「排日」下のアメリカにおける日本人移民が登場する。米国の中産

階級によくある「不合理な潔癖家」であるらしい紳士と、日本人にしては動作が劇的すぎるという東洋人とが、電車のなかで隣同士になったことにより「無言の人種戦」が始まり、女性に席を譲ることで体面を傷つけられた米国紳士が東洋人の帽子を押し下げて「名譽回復」を試みていたところ、実はネブラスカ州ミドルウェイト・ボクサーとして有名な日本人であったその東洋人に電光石火のアップカットを喰らって病院送りとなるという短篇である。その日本人ボクサー「ヤング東郷」はその場の証言により「かえつて警官たちの嘆賞と尊敬の裡にことなく放免」され、加えてその日の夕刊はまず米国紳士について「電車の中で東洋人に押搦ふためには莫大な入院費を必要とするといふ実例を親切にも自分の健康を犠牲にしてまで市民に示してくれた」と皮肉を言いながらも、その「人殺しの突上げ」を素人に向けたことに対して「亜米利加の公衆はそれだけ生命に対する不安を感じざるを得ない」と載せる。

注目されるのは、「排日」のなかで「恐るべき人種戦争」にも怯まずにその強さを示し、新聞に掲載されるというように大衆に向けて日本人の存在が強調されている点である。このようなモチーフは他の作品でも少なからず反復されている。たとえば「靴」(『新青年』、一九二五年三月)では、「私はこの時ほど、亜米利加の持つ民衆的な力を感じたことはなかった」という大戦終了の記念日に、「私」がその前日に靴を貸してやったヘンリー河田が大きな白い馬に乗って兵隊の行列に現れ、「群衆はヘンリーの男振りに拍手の波

を送った」という場面が描かれている。それを見物していた「私」は「なんとも言へない国民的な、森厳な心持が私の胸に込み上げてき」て、「ああ、日本人、ヘンリーも日本人、俺も日本人——遠く故国を離れて二十有余年、ふわふわとその日を送つてゐるやうに見えても、俺たちはやはり日本人なのだ、日本男子だ」という自覚にまで至る。後続する初期作品「サム・カゴシマ」(一九二五年二月)や「喧嘩師ジミイ」(一九二六年八月)などにも、このような人種や民族の対立のなかで存在を主張する「めりけんじやつぶ」の生態が顕著に描かれていると言えよう。

こうした強い日本人・存在感を示す日本人の表象を、一九二四年前後の排日移民法をめぐって昂揚していた国民感情に与するもの、つまり扇情的な表現というふうに解釈することも誤りではないだろう。佐伯彰一も「ヤング東郷」のプロットについて「いかにも型通りの愛国調、「日本人ここにあり」の武勇美談」の形式に陥っていることを指摘しているが、一方で「語り口における一種の勿体ぶりのヒューモア、客観調の余裕が、この一篇を、ただの型通りから救い上げている」<sup>(20)</sup>と述べているように、ナショナリズム形成に回収されない部分が構成されていることもたしかなのである。

これらの日本人であるという自覚は、室謙二が「日本国家への愛でもなければ、日本国家の一部であるというアイデンティティの自覚でもなかった。行政組織としての国家からはなれた日本と日本人への愛と自覚であり、アイデンティティであった」<sup>(21)</sup>と指摘している



ように、海太郎の仮構する日本という国家は特異なかたちで形成されている。その最大の要因は、「国語」の不在にあるのではないだろうか。谷譲次・牧逸馬の文体は「米国にゐるジャップ——日本人といふよりも、なにかしらジャップと言った方が適當つてゐるやうに思はれる快活で図々しい黄色ジンの使ふ言葉」で構成されており、かつして国民国家の共同体内において共有されるような言語ではない。「めりけんじやつぶ」たちの日本語は極端な場合「ときどき日本語に聞こえる程度の日本語」であつて、本人がその言語で日本人だと主張すれば「日本人の一人らしい」と通用してしまうような空間が形成されている（『返報』、『新青年』、一九二五年三月）。「めりけんじやつぶ」の都市空間のなかでは日本語をいかに志向しようとも、それは共同体を想像するための共通言語としては存立しえないのである。

同時に、海太郎の同時代の国民国家形成に対する批評意識を眺めるだけでも、彼の表現が無意識にそれと迎合するものではないことがわかるだろう。「めりけんじやつぶ商売往来」の予告文はその点で注目される。

あめりかはいま露骨な国家主義的になりつゝ、ある。しかもその背後に、大きな経済力と思ひ上つたこゝろもちとが漲つてゐるのだから、その影響するところは広く、且つ存外深いかもしれない。事実、私たちは今日の日本のいたるところに、願は

しい或ひは願はしくない亜米利加の片鱗を見出す。そして、見出す度毎に、亜米利加といふ社会の、物質文明における君臨的実在に今さらのやうに驚くのだ。その驚いた結果が、太平洋のむかう側の「世の中」を （原文ママ） exipiente して、その複雑な明暗の皺を総括的に諸君のまへに伸ばして見せたいといふ、私の愉快な欲望——あながち不要でもあるまい——となつた。これから半年にわたるめりけんじやつぶ商売往来において、私は、私の見たあめりか （原文ママ） を全的に、そして内部から、一貫した観察と印象の物語として順次にフィルムのやうに写し出してゆきたいと思つてゐる。

興味深いのは、「めりけんじやつぶ商売往来」がこのようにアメリカの国家主義化に対する批評的な見地をもつ一方で、同時にその国家主義化の発端を日本にも探求し、日本の国家主義をも照らし返していることである。その第一話「悲しきタキシード」（『新青年』、一九二七年七月）では、汽車の食堂へ行くと一向に案内されずに見て見ぬふりをされ、あとから来た人たちが先に食事を始めるのを見て「私は考へた。排日、排日、これこそ排日だ！これが排日でなくてなんであらう！」と憤慨するが、それがチツプを渡さなかったための冷遇にすぎなかったことがわかり、「えとらんぜはえてかうした僻みを持ちやすい。排日でも何でもないことを此の僻みからさう解釈して、却つて、先方を白眼でみることによつて、自体を悪化

させて、ほんとの排日の原因をつくるやうなことはないかしら」と

内省する話を語っている。仕舞には「排日？　こんなけちな眼で見れば、何か気に食はないことは凡て排日に見えるだらうし、また、先様にしたつて、そんな僻み根性のやつは排斥したくもらうぢやないか」と、日本人の「眼」こそ問題の焦点があると考察する海太郎は、その「眼」によって映し出された「一つの現象」としてのアメリカを描きだそうとするのである。そうすることによってのみ、そのアメリカという「現象」を作り出した日本という「眼」が反射的に浮かび上がってくるのではないだろうか。「これら devilmay-care のめりけんじやつぶに机の上で Blues を踊らせて、その多角形のりずむを通して、彼らの生活を、それを通して「俗」な亜米利加の真骨頭を、それを通して私たちじしんをよく見直したいと思つてゐる」（「じい・はいず」、『新青年』、一九二七年九月）という海太郎の意図に示されているように、「めりけんじやつぶ」はアメリカを描写すると同時に日本を照らし返す場として表象されるのである。海太郎は「めりけんじやつぶ商売往来」のなかで「めりけん・じやつぶ」を「メディア」と呼んでいる。本稿では『新青年』というメディアがどのように谷譲次・牧逸馬を誕生させたかを検討したが、その実態との関係性のなかで谷譲次・牧逸馬はもうひとつのメディア——「めりけん・じやつぶなるメディア」を構築していたのである。両者は同時代の国家や世界を大衆に可視化させるテキストとして機能しつつも、その文学場から描出される国家・世界はけっして一致

するものではなかったのである。

#### 4、おわりに

以上、『新青年』と長谷川海太郎との関係を一九二四年前後のメディア状況に遡行して考察し、海外雄飛や排日移民法をめぐる国家形成のなかで谷譲次・牧逸馬が生成して、「現象」としてのアメリカを描くところから日本を照らし返す「めりけん・じやつぶ」というもうひとつのメディアが指定されていることを検討した。

もちろんこれは私の「一人三人」論のうち『新青年』に限定した論考であり、まだ林不忘という存在があることも論究しなければならない。それには、他のメディア——『中央公論』やその他のモダン雑誌、ならびに新聞における海太郎の位置、さらには映画（映画化）による作家形成など広範な検証が必要とされる。本稿は、その長谷川海太郎研究における最初的一篇としてここに論じた次第である。

#### 注

- (1) 出口裕弘「長谷川海太郎の夢の跡」『文芸春秋』、二〇〇〇年五月
- (2) 『日本近代文学大辞典 第三卷』（講談社、一九七七年一月）、『日本現代文学大辞典 人名・事項篇』（明治書院、一九九四年六月）、『新訂作家・小説家人名辞典』（紀伊国屋書店、二〇〇二年一〇月）など。
- (3) 『増補改訂 新潮日本文学辞典』（新潮社、一九八八年一月）など。

- (4) 尾崎秀樹「解説」(一人三人全集Ⅰ、河出書房新社、一九七〇年一月)
- (5) 平浩一「量産を強いる時代」(『文芸と批評』、二〇〇一年一月)
- (6) 千葉亀雄「大衆作家としての牧氏」(『中央公論』、一九三五年八月)
- (7) 湯浅篤志・大山敏編『叢書「新青年」聞書抄』(博文館新社、一九九三年六月)
- (8) 『朝日年鑑』(一九二六年)
- (9) 川崎賢子『彼等の昭和——長谷川海太郎・リン二郎・濬・四郎』(白水社、一九九四年二月)
- (10) 海太郎の『函館新聞』での文筆活動に関する先行研究のなかで、その複数のペンネームがそれぞれ海太郎であるかについての推測が一致していない。川崎賢子は前掲『彼等の昭和——長谷川海太郎・リン二郎・濬・四郎』で、阿多羅緒児・迂名気迷子・多野郎を「もう一組の一人三人」として海太郎と解釈しているが、工藤英太郎『丹下左膳』を読む——長谷川海太郎の仕事』(平文社、一九九八年三月)では、迂名気迷子を海太郎ではなく武富安雄ではないかと想定している。
- (11) 前掲、川崎賢子『彼等の昭和——長谷川海太郎・リン二郎・濬・四郎』
- (12) 江口雄輔『「新青年」とその時代』(『ユリイカ』、一九八七年九月)
- (13) 森下雨村『編集局より』(『新青年』、一九二五年二月)
- (14) 長谷川雄一「排日移民法と満州・ブラジル——千葉豊治と永田稠の移民論を中心に——」(三輪公忠編著『日米危機の起源と排日移民法』、論創社、一九九七年四月)
- (15) 山下武『「新青年」をめぐる作家たち』(筑摩書房、一九九六年五月)
- (16) 森下雨村『編集局より』(『新青年』、一九二五年四月)
- (17) 森下雨村『編集局より』(『新青年』、一九二五年三月)に、「因に二月号掲載の「心理試験」は英訳して、英米の探偵雑誌へ発表するつもりで、牧逸馬氏の手で目下翻訳中である。」とある。
- (18) 排日移民法に対する日本の新聞報道については、『排日移民法と日本のマスメディア——近代日本政治資料④』(慶応義塾大学法学部政治学科、

一九九六年一月』にまとめられている。

- (19) 原口邦紘「一九二四年の移民問題——排日移民法下の帝国経済会議——」(前掲『日米危機の起源と排日移民法』)
- (20) 佐伯彰一「日米関係のなかの文字」(『文芸春秋』、一九八四年二月)
- (21) 室謙二『踊る地平線 めりけんじやつぶ』(長谷川海太郎伝)(晶文社、一九八五年一月)